

介護に携わる人の応援マガジン

月刊 介護保険

2015
8
vol. 234

特集

地域医療構想と介護

～受け皿問題を考える～

現地ルポ—自治体編

障害のある人の自立を介護現場で実現
滋賀県の取り組み

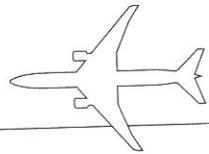
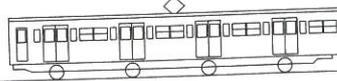
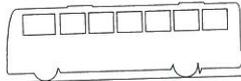
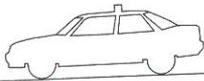
現地ルポ—事業者編

自立者を支援するケアハウス
ケアハウス「国立あおやぎ苑立川」
(東京都国立市)

レポート

高齢者多死時代の満足できる看取りとは
看取りを支えるカリスマ3者に話を聞く





第29回

街へ出よう!

介護予防・日常生活支援総合事業編

コミュニティに頼れない部分を補う トラベルヘルパーの役割

「おたく様を信じて、きっと頼りにしていますから」。そう言い終えると、電話は一方的に切られました。

この冬に倒れた姉の退院が決まり、高齢者施設へ移ることになったので、来週末に故郷へ行きたいという相談です。「たったひとりの妹である私しか、姉に代わって退院手続きや入所契約はできません。だから、どうしても行かなければならないの」と念押しされました。こうした急な相談には、社内のスタッフで対応せざるを得ません。

依頼人は、夫と2人、ふだんはヘルパーの助けを借りながら、高齢者住宅で暮らしています。股関節が悪く、痛みがあるために、車いすを使っています。また、夫には軽い認知症があり、一人で残していくことはできません。急な知らせで困り果て、もう一度助けてほしいということでした。前回は姉が緊急入院したときで、その時も急なトラベルヘルパーの依頼でした。

夫妻には子どもがいますが、海外で暮らしているため、こうした用事を頼むのは難しそうです。「以前の対応がよかったから」と頼まれ、ますます断れなくなりました。

当日、のどかな故郷へ到着すると、あたりの景色を楽しむ間もなく、空港から病院へと向かいました。ケアマネジャーが玄関で出迎えてくれ、元気になった姉との再会となりました。

翌日、退院先の施設から、2人の職員が福祉車両で迎えに来てくれました。すでに申し込んでいる町の施設が空くまでの待機入所で、夫妻は荷物を持ち、またタクシーでの移動です。

この施設はとてもいいと喜んでいると、すぐに銀行の方が来ました。介護保険料の引き落とし口座を開設するためだそうです。それが終わると今度は、施設の利用契約の確認と、たくさんの書類への捺印。さらに休む間もなく郵便局へすべりこみ、郵便物の転送手続きと、慌ただしく1日は終わってしまいました。米寿夫婦がよくここまでがんばれたと感心しましたが、当人たちはもうふらふらだと言って、旅館に着くなり休んでしまいました。

地域には、助け合い、信頼できるコミュニティがあります。だからこそ、雪の降る寒い日に暖房を消した部屋で倒れた依頼者の姉は、1日後でしたが発見され、九死に一生を得ることができました。しかし、地域の助け合いにも限りがあります。お金のからむ手続きを、家族に代わって行うことはできません。結局、手続きのための移動は、13回のタクシー利用となりました。

その都度タクシー会社に予約の電話を入れるのですが、遅い時は30分近く待たされます。その間、立ったままで車を待つこともあり、とても気の毒でした。

介護という言葉の響きもつ、ある種の利他的なイメージの暗さを払拭したいと介護旅行の活動していますが、現実には人の生き死にから離れることが、ますますできなくなっていることに気づかされた旅でした。



NPO法人
日本トラベルヘルパー協会
理事長 篠塚 恭一

PROFILE しづか・きょういち

株式会社SPIあ・える倶楽部代表取締役。
平成18年にNPO法人日本トラベルヘルパー
(外出支援専門員)協会を設立。